

垂水高校の存在意義と地域振興について

＝前提＝

1、垂水市民にとっての「県立垂水高等学校」の存在意義と地域振興

- (1) 垂水市民にとっての「県立垂水高等学校」への思いと存続の願い
- (2) 「県立垂水高等学校」の変遷と垂水市の「過疎化」及び「少子高齢化」との関連について
- (3) 進学選択地に係る垂水市としての地理的特殊事情
- (4) 垂水市及び垂水市教育委員会のこれまでの「教育」振興への取り組み
- (5) 垂水市における「県立垂水高等学校」振興及び青少年育成への取り組み
- (6) 「県立垂水高等学校」存続と地域活性化について
- (7) 「県立垂水高等学校」存続と大隅地域の発展について
- (8) まとめ 「大隅地域に、そして垂水市にある垂水高等学校」の存在意義及び振興・支援策について

(1) 垂水市民にとっての「県立垂水高等学校」への思いと存続の願い

垂水市は、近世において約250年間に渡り垂水島津家が治めてきました。垂水島津家は、特に文教の振興に力をいれ、当時、文化面においては藩内随一と称されました。特に、10代貴澄は学問所としては県内2番目となる早さで「文行館」を創立し、学問に力を注ぐことで“人を育てる”風土を築きました。そして、その気風が明治維新以降も受け継がれ、明治、大正、昭和にかけて各方面に多くの人材を排出しました。

このことは、垂水市民にとって大いなる誇りであり、現在に至るまでの「子弟の教育に高い情熱をもち、地域で支えていく」という市民の想いの基盤となっております。

時代は巡り、その「文行館」跡地の東側にあるのが「県立垂水高等学校」です。

この「県立垂水高等学校」は大正14年に高等女学校としてスタートし、昭和23年及び昭和31年の改称を経て、今年創立85年を迎える歴史と伝統ある学校です。校訓「和・学・行」のもとに、生徒と先生が心を一つにして、勉強や部活動に取り組んでいます。

そして、地域に根差し生徒ひとり一人を大切にし生徒の夢実現をサポートする高校、それが「県立垂水高等学校」です。

この間の「県立垂水高等学校」の卒業生は延べ10,162人であり、地域社会や産業に多くの有為な人材を輩出し、地域に支えられ地域と連携してきた歴史と伝統と実績のもとに、垂水市民にとってなくてはならない教育機関としてその役割は高く評価され現在に至っています。

垂水高等学校 卒業生数				平成23年5月1日 現在	
種別	男	女	合計	年次	
垂水実科高等女学校		785	785	昭和2年～昭和18年	
垂水高等女学校		503	503	昭和19年～昭和22年	
全日制	普通科	3,213	3,488	6,701	昭和23年～平成22年
	家政科		1,542	1,542	昭和23年～平成4年
	生活デザイン科	96	392	488	平成5年～平成22年
定時制	農業科	20		20	昭和23年～昭和27年
	家庭別科		96	96	
	普通科	27		27	
合計	3,356	6,806	10,162		

このように、これからも地域において、学校の良さや特色を生かしていくことによって、生徒・保護者をはじめ、地域の方々から信頼され、地域のニーズにあった教育活動を展開し、「活力があり特色のある垂水高校」となることが垂水市民の願いです。

これからも、市民や関係団体、そして垂水高校と連携しながら、垂水高校を地域で支え地域とともに歩んでいくために、高校生・保護者・垂水高校を全力でサポートしてまいります。

(2) 「県立垂水高等学校」の変遷と垂水市の「過疎化」及び「少子高齢化」との関連について

しかしながら、現在日本で地域の活性化や教育を語る上で問題となっている「過疎化」及び「少子高齢化」はこの垂水市においても顕在化しており、「県立垂水高等学校」においても

○昭和46年4月の普通科12学級、家政科3学級の計15学級をピークとして、

○昭和57年4月の普通科1学級減による普通科11学級、家政科3学級の計14学級に始まり、

○平成3年4月の学級再編成により家政科募集停止、生活デザイン科設置、普通科1学級減により、普通科8学級、家政科2学級、生活デザイン科1学級の11学級編成を経て、

○平成23年4月現在では普通科3学級、家政科3学級の計6学級となっております。

この学級・生徒数の減は、垂水市における人口減の影響とも多いに密着しており

○昭和46年 25,420人（世帯数7,732） 年次出生数

*統計たるみず平成23年度版資料より

○昭和57年 23,868人（世帯数8,230） 年次出生数 287人

○平成3年 21,846人（世帯数8,127） 年次出生数 172人

- 平成22年 17,254人（世帯数7,468） 年次出生数 107人となっており、また、特に**年齢構造**において**幼年人口（0-14歳）**の数が
- 昭和45年 6,975人
- 昭和55年 4,782人
- 平成7年 3,248人（全垂水市の人口に占める割合 15.5%）
- 平成12年 2,657人（全垂水市の人口に占める割合 13.2%）
- 平成17年 2,124人（全垂水市の人口に占める割合 11.2%）
- 平成22年 （注）国勢調査の結果公表を見て提示 とあるように、減少を続けている。

このように垂水市にあっては、人口減の影響は「少子高齢化社会」を迎えた最初の国勢調査である平成22年度（速報）と平成17年度の増減率を比較してみても垂水市は**△8.8%**であり、この数値は県平均△2.67%、市部平均2.17%を大きく超えており、「過疎化」及び「少子高齢化」の影響を受けざるを得ない状況となっている。

これを受けて、平成23年4月現在の「県立垂水高等学校」の学級生徒数は、普通科各学年1学級計3学級、生活デザイン科各学年1学級計3学級、総計で6学級となっている。

また、生徒数は普通科全学年計77名、生活デザイン科全学年計58名、総計135名となっている。

普通科	平成20年度(H20.5.1)			平成21年度(H21.5.1)			平成22年度(H22.5.1)			平成23年度(H23.4.1)			
	学年	計	定員数	充足率									
	計	138	240	計	109	200	計	97	160	計	77	120	64.2%
生活デザイン科	平成20年度(H20.5.1)			平成21年度(H21.5.1)			平成22年度(H22.5.1)			平成23年度(H22.5.1)			
	学年	計	定員数	充足率									
	計	69	120	計	69	120	計	59	120	計	58	120	48.3%
【垂水高校合計】	平成20年度(H20.5.1)			平成21年度(H21.5.1)			平成22年度(H22.5.1)			平成23年度(H22.5.1)			
	学年	計	定員数	充足率									
	1年	78	120	1年	54	80	1年	46	80	1年	47	80	58.8%
	2年	59	120	2年	71	120	2年	44	80	2年	45	80	56.3%
	3年	70	120	3年	53	120	3年	66	120	3年	43	80	53.8%
	計	207	360	計	178	320	計	156	280	計	135	240	56.3%

しかし、今後の垂水市の児童・生徒数はなだらかな減少傾向となることから、新たな発想の対策が必要となります。

【垂水市における高校入学年を基準とした児童・生徒数】

高校入学年	H38	H37	H36	H35	H34	H33	H32	H31	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	H22	H21
年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
学年							小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
児童生徒数	94	114	110	109	110	100	107	111	95	109	122	132	135	128	148	140	138	160

(3) 進学選択地に係る垂水市としての地理的特殊事情

上記②で述べたように、「県立垂水高等学校」の学級数及び生徒数の減は垂水市の「過疎化」及び「少子高齢化」の影響を受けているが、それに付随して「進学選択地に係る垂水市としての地理的特殊事情」を考慮しなければならない。

その「進学選択地に係る垂水市としての地理的特殊事情」とは、

- ① 垂水市は地理的位置として、鹿児島市・霧島市・鹿屋市の都市部と隣接し、それぞれの都市部への交通所要時間はさほど大差がないことから、**多岐にわたる進路先の選択先が可能となり、これにより進学選択地が市外の高等学校等に広がっていく傾向がある。**

平成22年3月卒業生の動向を見ても**垂水高校26.3%・市外73.7%**であり、高校の所在地を地区別で見ても**市内26.3%、鹿屋市36.5%、鹿児島学区26.3%、始良・伊佐学区8%**となっており市

外の学校への分散化が他地域に比して大きいことが分かります。

② 「鹿児島県立高等学校通学区域」において、垂水市の北側に位置する牛根地区の生徒は昨年までは始良東学区と肝属学区の普通科を、平成23年度より始良・伊佐学区と大隅学区の両方の学区の普通科を受験できたことにより、牛根地区では霧島市方面への進学に違和感がない。

③ 平成22年度垂水市内中学校卒業生で高校へ進学した137名の中で市外への進学者101名（137名-36名）の内、市外の高校の普通科に進学した生徒は39名（38.6%；39/101）、専門系の学科は62名（61.4%；62/101）であり、市外へ進学する生徒の専門系の学科への希望が多くしかも多岐にわたっており、このことは垂水高校の生活デザイン科系以外の専門系学科への進路希望がたいへん多いことを意味します。

*参考 普通科進学者数137名中59名の内訳（垂水高校20名[33.9%]、市外39名[66.1%]）

<平成20～22年度卒業生の学区別進路状況> *高校の所在地を学区ごとに分けたもの

行ラベル	値			H20	H21	H22
	合計 / H20年度	合計 / H21年度	合計 / H22年度			
▫ 県外	2	1	2			
▫ 県外	2	1	2	1.3%	0.7%	1.5%
公立	1					
高専		1	1			
私立	1		1			
▫ 県内	152	133	135			
▫ 始良・伊佐学区	11	10	11	7.1%	7.5%	8.0%
公立	4	1	5			
高専		3	1			
私立	7	6	5			
▫ 鹿屋市	64	60	50	41.6%	44.8%	36.5%
公立	53	46	39			
私立	11	14	11			
▫ 鹿児島学区	37	25	36	24.0%	18.7%	26.3%
公立	15	15	14			
私立	22	10	22			
▫ 垂水市	39	34	36	25.3%	25.4%	26.3%
公立	39	34	36			
▫ 大隅学区			1	0.0%	0.0%	0.7%
私立			1			
▫ 南薩学区	1	3	1	0.6%	2.2%	0.7%
私立	1	3	1			
▫ 北薩学区		1		0.0%	0.7%	0.0%
私立		1				
総計	154	134	137	100.0%	100.0%	100.0%

(4) 垂水市及び垂水市教育委員会のこれまでの「教育」振興への取り組み

垂水市では、平成20年10月に策定された「第4次垂水市総合計画」において、

「市民と協働のまちづくり」、

「将来へ自信を持って引き継げる環境に配慮したまちづくり」、

「地域資源を活用したまちづくり」を基本理念とし、

まちの将来像を「水清く 優しさわき出る温泉の町 垂水」としてまちづくりを進めています。

その中で教育分野においては、

「住民による住民のためのまちをつくる 地域づくり、人づくり、教育」を基本目標とし、重点目標として次の3つを掲げています。

- ① 来を担う子どもたちが、豊かな心とたくましい身体を持ち、自ら学び考え行動する「生きる力」を備え、
- ② 「ふるさとを愛し、誇りにする子ども」となるために、良好な教育環境づくりをすすめます。
- ③ 地域づくりにおいては、大人も子どもと共に生涯学びあうことのできる環境づくりをすすめていきます。

これを受けて、**垂水市教育委員会**は上記の基本目標・重点目標を実現するため「あしたをひらく心豊かでたくましい人づくり」を推進し、生涯学習の観点に立ち、主体性・創造性・国際性を備え、人間性豊かでたくましく生きる市民の育成をめざし、活力ある教育・文化の振興を図ってきました。

そもそも、垂水市においては従来より「垂水市の子らを光に！」の基本理念を掲げ、学校・家庭・地域社会が協力しそれぞれの役割を十分に果たしながら、未来を担う垂水市の子どもたちが豊かな心とたくましい身体を持ち、自ら学び考え行動する「生きる力」を備え、「ふるさと垂水を愛し、誇りにする子ども」となるために努めてきました。

また、平成21年3月には「垂水市教育振興基本計画」を策定し、併せて平成22年度から平成26年度までの5年間に取り組む施策を提示し、「温故創新」の精神で郷土の教育的な伝統や風土を生かして、全人教育・生涯学習の推進に努めることを基本方針とし、また、『生命や人権を尊重する心、他人を思いやる心、公共の精神、規範意識、伝統や文化を大切にする心、ふるさとを愛する心』など、時代を超えて変わらない価値あるものを大切にするとともに、少子高齢化の進行やグローバル化の進展、科学技術の発展、高度情報化、環境問題など、社会の変化にも的確かつ柔軟に対応する教育を推進しています。

このように垂水市においては、「未来を担う垂水市の青少年の育成」は最重要の取り組みの一つとなっております。

(5) 垂水市における「県立垂水高等学校」振興及び青少年育成への取り組み

教育の振興には、地域の担う役割が欠かせないものであります。

本市には、地域住民同士の助け合いの精神が残っていることに加え、多くの活動を通じて青少年の交流や育成活動に多くの市民が参加するなど、地域の方々の青少年の教育への関心と期待は大きく、教育を大事にする伝統があります。

また、過疎化により危ぶまれる地域芸能の伝承や地域の活性化そして地域の絆の拠りどころとして青少年の持つ役割が大きいこともあり、地域全体で青少年を守り育てる環境づくりが行われています。

このような環境のもと、垂水市では市内唯一の高校である「県立垂水高等学校」を地域全体で支えていくために、平成9年に市内関係団体の長または代表者を会員とする「**鹿児島県立垂水高等学校振興対策協議会**」（事務局；教育委員会教育総務課）を設置しました。

この会は、「地域の活性化は教育にあり」という理念に基づいて、市民が安心して暮らせる教育環境を整えるとともに、「県立垂水高等学校」の存続及び振興・発展を支援することを目的とし、①会員相互の連絡提携、

②垂水高校の振興支援に関する事項、

③垂水高校の地域と連携した教育活動の推進の各事業を行ってきました。

また、社会教育課で進める「ボランティア少年団」（団員 71 名）や垂水市内の高校生で組織するクラブである「垂広クラブ」等による奉仕活動や地域の行事参加等の自主的活動の実践により、自らを高め、ふるさと垂水を元気なまちにしていこうと活動が行われています。

(6) 「県立垂水高等学校」存続と地域活性化について

近年の「過疎化」及び「少子高齢化」等により「県立垂水高等学校」の生徒数は減少し、「教育水準の維持」等の要因により「県立垂水高等学校」の統合や廃止が話題となってきています。

しかしながら、「県立垂水高等学校」の統合や廃止は垂水市民にとって極めて深刻な状況とならざるを得ません。

以下、今回実施したアンケートから、「県立垂水高等学校」の統合や廃止がどのように感じ、どのような影響を懸念しているのかを分析してみますと、

(設問 1)

「垂水高校への入学者が今後減少していくと、垂水高校が統合されたり、廃止されたりする可能性があります。それについて、あなたはどのように思いますか？」の設問（回答記述式）において、特徴的な意見を見てみると

① 市内中学生（受験生）の立場から

- 行きたい高校に行けないのは悲しい。
- 垂水高校に進学希望の友達がかわいそう。
- 親やたくさんの方が垂水高校を卒業し伝統があるのに、なくなると寂しい。
- 自分たちのまちに一つも高校がなくなってしまう。
- 生徒が減少し廃止されると聞くと行きたくないと思う。
- 私は垂水高校に行きたいと思っています。父の母校でもあるのでなくなってほしくないです。
- デザイン関係の勉強がしたいので垂水高校がなくなると困る。
- 自分も垂水高校への進学を検討しているので、垂水高校に少しでも多くの人に入学してもらいたい。
- 廃止されたら（遠くの）高校に行きながら家のことをするのが大変になってしまう。

② 市内中学生の保護者の立場から

- たいへん困ります。
- 廃止されたら普通科の選択肢が少なくなる。
- 経済的負担増により若い人が今まで以上に減っていくのではないか。
- 垂水市唯一の高校がなくなるとは非常に寂しく若者の垂水離れ高齢化にもつながる。

③ 「県立垂水高等学校」に所属する高校生の立場から

- 自分の母校、自分の通っている学校がなくなるのはいやです。
- 通学にも便利だし、学習面でもよい高校だと思う。

- こんなに素晴らしい学校がなくなるなんて残念です。
- 家から近いし母に心配をかけたくない。
- 地元の中学生在が”進学する場“を残すべき。
- 少しでも垂水高校に来たい人がいるなら残すべき。

④ 「県立垂水高等学校」に所属する高校生の保護者の立場から

- なくなれば市外の高校となり経済的負担により高校に行けない生徒が出てくる。
- あれだけの設備があるのになくなればもったいない。
- 地元にある高校を母校として将来的にも誇りに思えるような学校であってほしい。
- 進学する公立高校の選択肢が少なくなることは子供たちにとりたいへんなこと。
- 伝統ある地元の高校がなくなることは財産を失うようなこと。子供たちがいなくなった声の響かない校舎を思うと想像もしたくない。
- 高校もないところに若い人はいなくなる。
- 女の子ですと地元なので安心して通学させることができます。
- 普通科に進学するとなると鹿屋高校ではレベルが高すぎて、普通科希望者は困る。
- せっかく地元には高校があり素晴らしい先生たちもいらっしゃる。
- 唯一デザイン科のある学校として残すべき。
- これからますます経済的に厳しい世の中になり、地元高校はなくてはならないと思う。
- 自然も多く子ども同士が仲が良い。
- 将来垂水市の街を活性化するためにも、将来の子供たちのためにもいつまでもあってほしい。
- 垂水に高校までなくなったら何も無い垂水市になる。
- 社会がまさに不安定になってきた今こそマイナス的に廃止に向けるのではなく、ぜひ愛と理解をもっていただきたい。
- 子どもが垂水高校に入学して自分の子供にはとてもいい高校です。下の子も入りたいと言っています。

また、**市民の声**を会合等でヒアリングした際の意見として

⑤ 地域の人々の立場から

- 今回の問題は垂水市全体の問題としてとらえ危機感を持たないといけない。
- 垂水高校がなくなれば、市の活力はもちろんのこと、保護者の生活・経済問題にも影響がある。
- 垂水高校がなくなれば「非常に寂しいまち」になり、「まち全体が若さを失っている」状態になると危惧する。
- 懸念するのは、このままでは「垂水高校にいても先がない」となってしまうことだ。

また、**垂水市の行政**としての「活力あるまちづくり、人づくり」の観点からヒアリングしたところ

⑥ 垂水市（行政）の立場から

- 中学生の進路先として、唯一の高校が無くなる事の問題があり、地元の垂水市で学ば

いという生徒の希望がかなえられなくなる。

- 高校生を持つ家庭の負担（通学費等の経済的負担増、早起き時間の負担など）が大きくなり、ひいては経済的理由で進学希望の道が閉ざされ、人生設計の変更を余儀なくされる問題。
- 地域の活力の衰退（高校生が校内で活動する姿が見られないことや校外活動、部活動などでの触れ合いがなくなること。朝夕の通学で大人・子供が触れ合う機会がなくなることの寂しさ。商店街から更に人通りが少なくなるマイナス効果など）により過疎化に一層の拍車をかけることになる。
- 「教育費がかさむので子供を産むのをあきらめる→人口減少」に繋がったり、保護者・生徒の人口流出も考えられる。
- 高校生がいなくなることにより、活気を失い、災害時などに必要な人的資源も減少し、市関係の行事等の参加者が少なくなる恐れがある。
- 地域及び対外的に与える「垂水市のイメージ」への影響。活力の低下。
- 高等学校のない、県の施設が無い市となり、人口増や地域活性化に影響がある。
- 郷土への愛着をもち、地域産業や活力ある地域づくりに貢献する若者の人材不足が懸念される。

以上のように、「県立垂水高等学校」の統合や廃止が中・高校生や保護者、ひいては市民各層の生活や活動、特に垂水市が最重要施策の一つとする「未来を担う青少年の育成」や「まちの活性化」に多大なる影響があることから、垂水市においては「県立垂水高等学校」の存続はどうしても果たさなければならぬ重要な課題といえます。

なぜならば、過疎がすすむ地域から高校がなくなることは、人々の絆や地域崩壊にもつながる重大な課題だからです。

そこで、地域に生きる最大の条件である「教育」の確保と整備がないがしろにされることなく、地域に生き、安心して子育てが出来る教育条件の確保と整備がなされることにより、小規模校の特色を生かしながら存続・振興することこそが、子どもや子育て世代、若者が住める地域再生への切り札であると考えます。

(7) 「県立垂水高等学校」存続と大隅地域の発展について

今回問題となっている「過疎化」及び「少子高齢化」については、特にこの大隅地域において地域力衰退の大きな要因となっています。

特に大隅地域振興局管内の人口減少率は、平成 22 年の国勢調査速報値（250,513 人）と前回平成 17 年調査時点（262,837 人）と比較して $\Delta 4.69\%$ であり、県全体の減少率 $\Delta 2.67\%$ よりも大きい。

また、大隅地域振興局管内の 4 市 5 町の平成 22 年国勢調査（速報値）による人口減少を前回調査と比較して個別にみると、鹿屋市（ $\Delta 1.06\%$ ） 垂水市（ $\Delta 8.84\%$ ） 曾於市（ $\Delta 7.35\%$ ） 志布志市（ $\Delta 4.97\%$ ） 大崎町（ $\Delta 7.21\%$ ） 東串良町（ $\Delta 4.51\%$ ）



錦江町（△10.34％） 南大隅町（△10.90％） 肝付町（△6.29％）となっており、県内他市町村に比して減少率の大きい市町が大隅地域振興局管内には多いということが分かります。

また、このような著しい人口減少が若年層を中心としたものであるため、人口減少に伴い高齢化が進んできています。

この大隅地域のおかれた現況は、この他にも経済・財政力、交通及び情報通信、産業の各方面において、特に所得や雇用情勢において県内他地域との「地域間格差」があることとなり、最近では「九州新幹線全線開業後の地域間格差」の影響も話題になっています。

このような大隅地域の状況に抗して、鹿児島県では大隅地域の振興を図るため、これまで「大隅地方拠点都市地域基本計画」（平成7年）、

「大隅地域半島振興計画」（平成17年）、

「大隅地域振興プラン」（平成22年3月）

「鹿児島県過疎地域自立促進方針[平成22年度～平成27年度]」（平成22年8月）などにより様々な施策を推進しようとしています。

また、大隅地域内の自治体についても、「大隅はひとつ」の基本的な考え方の下、大隅の総合的な振興を図るため大隅地域4市5町の市町長、議会議長を委員とする任意協議会「大隅開発期成会」での活動や、平成22年3月には国や県を上回る速度で進行する高齢化や過疎化など地域に共通する課題に対応していくこと等を目的として「大隅定住自立圏共生ビジョン」を策定するなど、大隅地域全体の振興に取り組んできました。

その中で、「大隅地域振興プラン」（平成22年3月）において第3章大隅地域が目指す将来の姿として、「すべての地域住民が夢と誇りを持てる新たな未来への挑戦」が掲げられています。

また、第4章挑戦すべき課題と取組の方向性として

挑戦1「支えあい、安心して健やかに暮らせる大隅づくり」において⑤「すこやかに育むおおすみの子」ウ子育て・青少年育成の環境づくりの『取り組みの方向性』として、子育てや青少年育成に関わる活動に老人クラブや事業所等の参加を促進し、地域全体で子育て・青少年育成に関わる環境を構築していきます。（伝統文化継承、職場訪問、世代間交流、地域貢献活動等）

さらに挑戦8「人が行き交い、文化が香る大隅づくり」の『取り組みの方向性』ではア確かな学力の定着、

イ地域に信頼できる学校づくり、

ウ地域全体で子どもを守り育てる環境づくり、

エ生涯にわたって学べる環境づくりの各項目が掲げられ、学校・家庭・地域が一体となった教育を推進することを目指しています。

しかしながら、地元から県立高校がなくなることで地域の衰退に拍車がかかることにつながります。

このように、大隅地域ではさまざまな厳しい現状を踏まえながらも、現在大隅地域にある素晴らしい自然や地域の財産をいかながら、大隅地域全体で「すべての地域住民が夢と誇りを持てる新たな未来への挑戦」に向けて頑張っているところです。」

さて、「県立垂水高等学校」はこの大隅地域の垂水市にある高等学校として今までに数多くの有為な人材を輩出しており、また「垂水市のまちづくり」ひいては大隅地域の振興に大きく寄与してきました。

現在においても、「県立垂水高等学校」は垂水市にとっても、また大隅地域にとっても「すべての地域住民が夢と誇りを持てる」存在価値のある教育施設であります。

であるからこそ、「県立垂水高等学校」の振興・存続は、「過疎化」及び「少子高齢化」等の状況を改善し、さらなる地域活性化の礎として「新たな未来への挑戦」が期待されています。

(8) まとめ 「大隅地域に、そして垂水市にある垂水高等学校」の存在意義及び振興・支援策について

このように、「垂水高等学校」は長年にわたって伝統と校風を築いてきており、地域に貢献する人材の育成にも資する重要な存在であり、地域の活力に大いに貢献してきました。

これまでの垂水高等学校が地域に果たしてきた役割を十分に踏まえ、地域の子どもたち、保護者、住民に大きな不安を与えることなく「垂水高等学校」の存続と振興策を図らなければなりません。

学校は、地域の財産と言われ、文化の拠り所、地域の活力そして希望の源であります。

高校がなくなれば、生徒・保護者には時間的・経済的・身体的に大きな負担増となり、学習や部活動に支障をきたすことになります。

また、学校が統廃合されると言われる中で希望者が減るのは当然であり、「地域力」の強化が叫ばれる中、地域の人々が大きな関心を寄せています。

ここに、これからの振興策を考える上で示唆に富む文章があります。

[沖縄県立高等学校編成整備計画（平成14年度～平成23年度）平成14年3月]

～沖縄県教育委員会 教育長 津嘉山朝祥氏の「はじめに」の文章より～

「この度の県立高等学校編成整備計画では、基礎基本を踏まえながら豊かな人間性や自ら考え主体的に行動するなどの「生きる力」を育むことを重視するとともに生徒の多様化に適切に対応し、多様な個性や能力を存分に伸ばすことのできる教育システムの構築を主眼とした生徒の視点に立った魅力ある学校づくりを推進していくものとする。

また、21世紀を迎えた今、本県は経済社会、文化などあらゆる面で自立に向けた持続的発展の基礎を築くべき重要な転換期を迎えており、新しい県づくりを進めるうえで、あらゆる社会システムの基盤となる教育の役割は極めて重要である。このような認識のもとに、自立に向けた持続的発展を支える人材育成の見地から、

- ・国際的な貢献拠点の実現など新しい時代を担う人づくり、
- ・豊かな自然や環境を生かし伝統文化の継承発展を支える人づくり、
- ・起業家意識の高揚を図り新事業の創出や情報通信産業の集積、産業の高付加価値を図るための人づくり、
- ・地域特性を生かした農林水産業の後継者育成などコンセプトを明確にした学校づくりを進めることとする。

高等学校が地域文化の拠点の一つであったり高校生の存在が地域の活力を引き出している場合が多いため、小規模であっても生徒や地域の実情に即し地域と連携を図りながら具体的な解決策を打ち出すなど特色ある学校づくりに取り組むこととする。」(引用終わり)

さて、小規模校である「垂水高等学校」の活性化には、過疎化対策を含めた、行政による幅広い総合的な地域振興策が不可欠であり、なお一層の地域と連携した活動を実施するとともに、当事者である「県立垂水高等学校」においても「なお一層地域に必要とされる高等学校」となっていたきたい。

また、生徒・保護者をはじめ、地域の方々から信頼され、地域のニーズにあった教育活動を展開し、生徒にとってより魅力のある教育環境を整え「魅力と活力ある学校」をつくっていただきたい。

そのためにも、現在の学校の良さや特色を生かしていくことも念頭において、学校や地域の関係者の方々が手を携えて、新しい学校づくりに理解と協力を得ていくことが今求められています。

よって、鹿児島県及び鹿児島県教育委員会には教育百年の見地から、鹿児島県の教育行政が明治維新以来脈々と受け継いできた「教育は人なり」を基本に、横の連携をつくることで「活かす」方策を見据え、過疎からの脱却を目指し地域の再興を目指す「鹿児島県独自の教育振興策」をお願いしたい。

これを受け垂水市及び垂水市民は「垂水高校」振興・支援策に向けたプランを別紙のとおり取りまとめ、実行していくこととします。